

鶴
の
さ
う
し

鶴のさうし上

かけ給ふ―兼ねるをいふ

情なさけ深ふかうして、富貴ふつきの家と榮さかゆる事、中比宰相ちひさうにて右兵衛督うひやうぶのかみをかけ給ふ人ありけり。父は左大將さだいしやうむねまさとして、世に覺おぼえいみじかりしが、此宰相は殊更慈悲心深く、飢うゑたるものに食しよくを與よへ、簍やうれたる人に衣裝いさうを取らせ、我身われみの上を忘れ給へば、何時いつしか家貧いふしくなり、朝餉あさけ夕餉ゆふけの烟けも絶たえ、春夏はろなつの衣ころもをも脱はぎ更さらへんたよりもなし。自然おのづから人の交際まじはりも薄うすくなり、親おやしきも遠とほざかりければ、かくて世に生存なからへ、時めく人に嗤わらはれんも心憂うれし、いかなる山林やまはやしにも籠かこり、身の隱家かくれがを求めんとて、只一人ただひとりそのとも知らず、迷まよひ出でて給ふ。或山蔭いほりに草の庵いほりの有ありけるを、一夜いちやの宿やどと頼たのみて夜を明し給ふ。夜明よあけけて里人さとびと來きり、是これは人の住すむ家ならぬに、如何なる人なれば、艷なまめきたる容姿すがたにて、この内にはおはしますと咎とがめければ、我は行方ゆくへもなき世捨人はくしやなれば、汝等心ありて孚はみてくれよかし、我身われみに叶かなふ事をば、如何なる奉公ほうこうをもし侍はんべらんと宣のたまへば、里人聞きくより

も、御身の姿にて田の草を取り、畑打つ事もなるまじ、只何處へも行かせ給へと申しければ、力及ばぬ次第とて、庵の内を出で給ふが、やうく力弛み足も立たざりければ、一足踏みては畔に倒れ、二足には巖の苔に打ち轉び、行きやらぬ風情を、里人哀れと思ひければ、如何に聞召せ、我々一日の営みだにも容易からねば、御身を養ひ奉らん事も叶ひ難し、さりながら餘り御痛はしく候へば、是に留り給ひて、晝は稻葉の鳥を追ひ、夜は小男鹿を拂ひて給はらば、此所に留め申さんと云ひければ、如何にも争みて給ひ給へ、嬉しき人々の志かなと、涙を流し給へば、里人も情深く、柴の庵を設ひて留め奉る。

己が食を分けて其日の飢をば助けてけり。日もやうく暮れければ、里人は皆歸りて、物荒涼じき山陰に、只一人臥し給へば、秋風烈しく身にも染みて、露の手枕安からず、事問ひ交すものとは、虎狼野干の叫ぶ聲、耳に従ひ目に觸れて、昔の夢も結ばねば、何に樂む世の中ぞや。傳へ聞く唐土のちやうさうといへし者、世の交りを疎み果て、七珍萬寶を捨て、山中に籠り居て、悟の道を得るとかや。我は濁世の凡夫にて、觀念坐禪の力もなし。只一念の功力にて、安養淨土の營みには、佛の名號に若くはなしとて、高らかに念佛して夜を明し給へば、鳥類畜類も其聲にや靜まりけん、早稲田の稻も食ひ荒さず、晚稻の穂並

ちやうさう未
詳
いへし者一ひ
し者の訛

田面の如く―田
面の此の如くの
衍か
榮ふる―榮ゆる
の訛

も其儘色づく秋となりにけり。里人はを見て、あら不思議や、我々終夜漉返を立てて
鹿を追ひ、鳴子を引きて鳥を拂へども、荒れ果てにたる田面の如く、初めてかやうに榮ふ
る事、御身の恵みと覺えたり、是菩薩の化身なりとて悦ぶ事限りなし。漸うに孚みけれ
ども、粟の飯稗の粥にて貯へ置ける物もなし。晝は來りて慰め奉り、烟を打ち稻を刈り、
御目にかげ日數を送り給ふなり。

或日の事なるに、柴の庵を立ち出でて、田面の中道を踏み分けて、落穂を拾ひ、袖に入
れ、霜の下草打ち拂ひ、うつらふ菊を摘みためて、昔の事を思ひ出で、今の浮世を慰み
て、四方の梢を眺め給ふ。錦彩る山の端は、染むる時雨や厭ふらん、雲井を渡る雁音
は誰が玉章や掛けつらん、忍ぶ甲斐なき故里も、今更思ひ出でけれども、一度厭ひし浮
世なれば、立ち歸るべき心地もせず、柴の樞の屢々も、住めば都の心地して、日も暮れ
方になりぬれば、ありし庵に立ち歸らんとし給ふ處に、何處とも知らず、雛鶴一つ飛び
來り、澤邊の小田の片淵に降り居つゝ、漁してこそ居たりけれ。宰相熟々と見給ひて、あ
らゆよしの鳥の姿かな 費長房といふ仙人は、鶴の翼に宿をとり、虚空を翔る例あり
衛の懿公と言ふ者は、鶴を愛して一生を暮すとかや、我はせめて野鳥の鶴を愛しつゝ、今

壽命せんくわー
せんくわは選化
か

日の憂き日を慰まんと、岸の隠に佇みて、驚かさじと見給ふなり。かよりける處に、男子一人堤傳ひに忍び寄り、天の網を引延へて、彼の鶴を手捕りにして、首を振ちて、羽交の下にぞ敷きにけり。無慙やな雛鶴は、今まで虚空を翔り、水を渡り、思ふ事の有りけにも無きに、彼の男に生捕られ、今を最後の一聲は、壽命せんくわと聞えたり。宰相是を聞き給ひ、只今の鳴く聲は、千年の鶴命終ると悲めり、是を聞きながら目の前にて、殺さん事我殺生となるべきと思しければ、するく走り寄り、如何に御身は、何とて其鶴をば取りて、害し給ふぞや。我に得させ候へ、親の孝養に放つべしと呼はり給へば、男子聞きて阿々と打ち笑ひ、和殿は何者なれば、偶捕りたる此鶴を、得させよと乞ふこそ不思議なれ、我は此里の傍に住む獵師なるが、明暮江河の鱗を漁り、山野の獸を捕りて、一生を過ぐるなり、此四五日は如何したりけん、沖の鷗、磯千鳥の、一つも捕り得ずして、妻子が飢に臨みしなり、今日偶捕りたる此鶴は、天の與へと思ひしに、くれよと言ふこそ心得ね、活けて置くにこそ人の怨みも有るべけれと言ふまよに、鶴の細首引き延べ、己が小脇に引き敷きて、力を出して締めたりけり。宰相愈悲しく思召し、獵師に取り付き、暫く待ち給へ、假令殺し給ふとも我が言ふ事を聞き給へ、釋尊一代

の御法にも、人間と生れんもの、五戒を保ちて、佛果を得る、殺生、偷盜、邪淫、妄語、飲酒戒是也、上代の事は扱置き、五百戒も保ち給へども、末世濁亂の我々は、一戒をも保ち難し、それを如何にと言ふに、先づ偷盜戒は盜人の事、手を出しては取らざれども、欲しきと思ふ妄念は、日々夜々に絶え難し、此執著の盡きざれば、偷盜戒も破るなり、邪淫戒は夫婦最愛の事なれば、俗體にては保ち難し、妄語戒は虚言を言ひ、人の交情を避くる事、さがなき人に交れば、是も保つに難かるべし、飲酒戒は酒を絶つ事、上一人より下萬民に至る迄、悦びの處には酒を以つて富貴をなし、哀傷憂への座敷にも酔に化して忘るれば、是も在家は叶ひ難し、其内殺生戒を第一として、殊に是を戒め給ふ、御身如何なる果報にて、世の営みも多かるべし、生きたるものの命を取り、明日をも知らぬ露の身を、助からんと思ふ心の罪深さよ、其上鶴は千年の齡を保ち、人間には勝りたり、假令我身は鶴に代りて死するとも、助けて給べと宣へば、獵師愈腹を立て、我は賤しき者なれば、五戒も十戒も辨へず、只價もいらぬ魚を漁り、人も咎めぬ鳥を捕り、調味して食ふ時は、罪も報も覺えぬなり、御身の命に代り給ふとも、我が餌食ともならばこそ、由なき人に見付けられ、時を移して妻や子供の待つべきに、こゝ放し給へと怒りけれ



大きよせんちよ
—大鹽千町か

せめう—未詳

ば、宰相聞き給ひ、實に道理と思へども、昔も去る例あり、釋尊の昔、薩埵王子と言ひし時、御懷の中へ山鳩一つ飛び入りぬ、後より白斑の鷹追ひ來り、其鳩出し給へとせめければ、力及ばせ給はず、鳩の代りに御身の肉を切りて鷹に與へ給へば、流石鷹心ありて、御志の難有さに鳩を助けて歸りしなり、其善根にて、一代の教主釋迦牟尼佛と生れ給ひ、鷹も優しき心にて、成佛したると説かれたり、御身殺生し給ふ事、五逆の罪には勝れども、今一念の慈悲心にて無量の罪を滅し、極樂世界に生れ給ふべし、鶴の代には我重代の守なれども、是を參らせんとて、肌にさしたる金作りの刀をこそ與へ給ふ。扱元より慾心深き者なれば、莞爾と打笑ひ、此刀を代なしては、一期の貯蓄あるべきと思ひければ、今日より獵師を止むべきなり、鶴を御身に參らするとて、急ぎ我家に歸りけり。宰相嬉しく思召し、鶴を抱き取り、汝心あらば物を聞け、大きよせんちよにいづれば、獵師の憂へ有るとは此事ぞや、唐土の鳳凰は聖人の時世に出で、賤しき者の見る事なし、汝は日本の鳥の王として、此淺澤に降り居つと、捕られけるこそ淺ましけれ、今より後人なき島に下り、千町が野邊に求食して、人近づかば飛び去り、小田のかたへの稻垣は、天の網と思ふべしと、能くくせめうを含めつと、鶴を放ち給ふなり。彼の刀と申すは家に傳

はる重寶なれば、乞食非人の後までも、肌を放さじと持ち給ひしかども、慈悲の心を先として、獵師に與へ給ひし御志、例少き善根なり。宰相暫く鶴の後を見送り給へば、鶴も心ありけるにや、後を見返りく／＼て雲路遙かに上りければ、嬉しく思召し、柴の庵に歸り給ふ。明くる日の夕暮に、さもやんごとなき上臈の、下女一人連れて來り、此庵の内に案内申さんとこそ呼ばはりける。誰なるらんとていで給へば、年の程二十ばかりなる女房の、濃き紅の五つ重に、綾の鞋に顔隠して立ち給ふ。宰相御覽じて、あら淺ましや、如何なる變化のものなるぞや。かゝる山中に斯様の人の來るらん事、思ひも寄らぬ事なれば、身の毛も彌立つて覺えけれども、臆したる氣色もなく、如何なる人ぞと問ひ給へば、女房立ち寄り、我は都の者にて候ふが、故なき人の妬をうけ、何處ともなく出でけるが、焚く火の光につきて、この處に迷ひ來りたり、一夜の宿を貸し給へと申しければ、宰相聞召し、よし何處の人にてもおはせよかし、此處は人里遠き處にて、我ならで住む者もなし、夜更けぬれば鹿獸の凄じく、嵐烈しき山彦は、雷の如くなれば、いかでか明かさせ給ふべき、何處へなりとも、御志の方の侍らば、送りて參らせんと言ひければ、女房聞きて、いやとよ、何處を終の住所とも定めず、頼むべき方も有らざれば、ひらに一夜

を明かさせて給ひ給へ、野邊の千草の葉毎にも、露の宿りは有るものを、森の茂みの木
隠れは、翼の宿となるぞかし、ましてや御身は世捨人の身の、問ひ寄るこそは他生の縁、
庵の内に叶はずは、軒端の下のきばの轉寐うたねに、何か無情くましますと、怨み顔に見えければ、
宰相も流石岩木の身ならねば、餘り見苦しき庵の内の恥しさに否とは申しつれ、さらば
此方へ入らせ給へとて、庵を開きて入れ給ふ。狭き藁屋の内なれば、女房二人をば、奥
の間に宿し、我身は櫃こぼその前に臥し給ふ。其夜は殊に物淋しく、軒端を誘ふ秋風、肌はい
とど狭筵さひらの、露微睡つゆまろまんよしもなし。藻屑の烟焚きすさび、世の憂事を語り給ふ。女房
言ひけるは、御身の容貌を見奉るに、いかさま通常人とも覺えず、流竄人にてまします
か、自らも故ある者なれば、今日よりは是に止め置き、妻と定め給ふならば、寶を與へ奉らん
とぞ申しける。宰相怪しく思ひながら、元より誠の道心ならず、身の貧なるに従ひて、世
の謗をつましく、暫しは隠れ給へども、未だ御年廿二、盛の花の山櫻、雲に隠るゝ風情
にて、誘ふにつけて色に愛で、熟々と見給へば、翡翠のかんざしたをやかに、青柳の風を
含める装ひ、打項低れたる顔容は、雨に靡ける海棠の、眠れる花の姿なり。我古の清涼
殿の御遊の時、數多の女御后を見しかども、かゝるめでたき貌はなし、唐土皇帝の楊貴

妃は、一度笑めば百の媚、君が心を迷はして、世の政道を亂すとなり。我も浮世を厭へども、心は空に憧れて、覺えず寄り添ひ給ひつゝ、苔の筵を褥とし、早稻田の稻を枕にて寢亂髪ねんだれがみの打匂うちにおひ、梅の小枝さくらえに降る雪の、消えかゝりたる肌はだの色、いをねもならはぬ下紐したひもを、解けて寢ざりし宵の間の、悔しかりける睦言むつごは、まだ何事も語らはぬに、遠山寺とほやまでらの鐘の聲、物凄ものさまじく聞えければ、媚鳥やものめがらすの浮かれ聲も、今宵しもさかしらと聞きなし給ふ。誠に昨日までは、秋の夜の長き怨みの床の上、今日は引きかへて、千夜ちよを一夜やと願ひ給へども、軒端の山に横雲の、引く月星の光も旭日の影にそばひ、夜はほのくくと明けけれども、訪れ通ふ者もあらねば、扇あふの簾すだれ掲あげつゝ、尙熟々と見給ふに、言はん方なくらうたけて、雅やかなる面影おもかげは、立ち離れん由もなし。

女房も心打解けて、下女に持せたる袋の内より、黄金千兩取出し、是にて萬計らひ給へと言ひければ、宰相悦び給ひ、今まで孚みし里人を近づけ、此由かくと宣へば、里人めでたき事なりとて、黄金を受取り、番匠はんじやう數多呼あまたび寄せて、御殿を結構に作り、衣裳いしやうを調へ、召使めしふ男女をとこをんな數多揃あまたへ、或は道具あるひを拵こしらへ、俄に長者ちやうじやとなり給ふ。此事里々に隠れなかりければ、處の侍さむらいは申すに及はず、土民百姓に至るまで、酒肴さけさかなを調へて、參るものも

あり、時の景物なればとて、果實このみを數を盡して、我劣らじと參りつゝ、今日より御内の者となり侍らんと、敬うやまひける事限りなし。其品々の引出物、絹小袖を賜はる者もあり、金銀を賜はりて、悦ぶ事は限りなし。去程に其年も暮れ、新玉の春にもなりければ、其國の守護宮崎左衛門督しほご みやざき さちんのくさむといふ人、身内外みうちさう様の者百餘人召し具して、朝鷹狩あさたかがりに出でにけり。裾野すそのの原の勢子せこの者、二行にかうに立つてぞ狩り廻る。峯とも谷とも分かずして、雪間の草ゆきまを葉しかりとし、尾上そのへの松を目に掛けて、四方しほうの谷より狩り上る。岩を飛ばせ、古木こぼくを拂ひければ、雉、山鳥は言ふに及ばず、野干臥猪やかんふしの床までも、隠れん方もなかりけり。大鷹小鷹の飛び違ちがひ、中有ちゆうにて組んで落つる處を、押へて取るものもあり、兎うさぎ、貉むじなを目に掛けて、弓矢を取つて追ふもあり、太刀、刀を抜き持つて、猛たけりてかゝる猪いのししを向様に打つもあり、巳みの時の初めより午うまの刻さかの下りまで、打留うちどめたる鳥獸とりけだもの、數ふるに還いこあらず、面白かりし見物けんぶつなり。

各立歸らんとせし時に、春雨はるさめしめやかに降り注ぎければ、思ひこひかひに木陰こかげに宿を借り、岩の洞ほらに立ち隠れて、雨を凌ぎて居たりけり。宮崎殿は、馬に乗り谷に降り給ふが、とある山陰に烟の立ち上りのぼりければ、人里やあると、只一人駒を早めて行き給ふ。堀の船橋

打渡り、内の體を見給ふに、四重に塀をかけ、屋形の棟數數多あり。あら不思議や、我領内にかよるゆゑしき者の有りけるぞや、如何なる者の住むやらんと、小柴垣の陰に休らひて、暫く佇み給ひける。宰相も北方も見人ありとも知らず、南面の廣椽に立出でて、庭の花を見給ふに、梢色添ふ初櫻、かつ散り初むる眺めつゝ、北方取敢へず、

かぞいろの育てあけにし甲斐もなくいたくも雨の花をうつおとと口吟み給へば、宰相殿も思ひ續けて、北方を熟々と見給ひて、如何ばかりの事が思ひ出で給ひけん、

初櫻いろにそめぬる春雨は花の紐とくつまにぞありけると、打詠じ給へば、北方打笑みて、

春雨は同じけしきにすさめどもあだにも散りし花の色かなと戯れ給ふを、左衛門督熟々と見て、あらぬ思ひのつき添ひて、立ち忍ばん由もなく、さし現れて覗き給へば、

鶴のさうし中

北方御覽じて、あれは誰なるらん、あら恥しとて、宰相諸共に内に入り給ふ。宮崎殿は今一度見る由もがなと佇み給ふを、人々参りて、やうく雨も晴れ候へば、歸らせ給へといさめけれども、只茫然として、物も更に宣はず、御心地怪しきとて、駒の口を取り、御腰を抱き、御内の人々前後に立ちて、我家に歸り給ひけり。今は只管戀の病と臥し沈み、せん方もなく思ひければ、御内の侍に田邊の七良とて、萬賢しき者の有りけるを呼び出し、言ひいだすにつけて便なけれども、狩場の山の主の女を、一目見しより、其面影の身に添ひて、かよる病となりけるは、いかゞして薰る烟の胸の中、思ひ消えなん謀を、よきに計らひて得させよと有りければ、七良承り、是は理なき事を思ひより給ふものかなと、思ひながら、さも言はど、いとど物病にやなり給ひなん、暫し慰めばやと思ひ、それこそいと易き事なるべし、男女の習ひ、慕ふに靡かぬ者はなし、我々が伯母に内侍の局と申すものは、元は都に宮仕して、萬優しき人なるが、此三年は、此

其匂ひなつかし
けれど一此下
に「枝のさまこ
ちたく柳は」な
どいふ文句脱落
せしなるべし

處きこころの傍かたはらに、さる者と語らひて侍はんべるが、常に彼の家に參る由を承る、此人を呼ひて、事の心を尋ね給へと申しければ、宮崎悦えび給ひ、それこそ然しかるべき神の御引合せと覺えたれ、急ぎ呼び寄せ侍はんべれと聞えければ、やがて使立てられけり。局參りて、何事の御用なれば、自らをば召し給ふぞや。宮崎殿枕元近く呼び寄せ、扱あも此山あなの彼方なたに、いみじく作りし家居いへには、如何なる者の住みけるぞや、主あるじの名をば何と云ふぞと問ひければ、局承り、自らも去年こぞの冬より折々參り候ふが、主あるじの御名は誰と知りたるものも候はず、北方ふりびとも、去年こぞの秋迎へ給ふと承る、誠に家榮えて、今長者とぞ申しける、只天よりの降人ふりびとのやうにこそ言ひ習ならし侍ると語りければ、宮崎聞き給ひ、扱あも其北方は年は何歳つになり給ふぞや、さこそ情なさけの深からん、覺束なしと問ひ給へば、局承り、されば御年は二十ばかりにてもや候ふべき、容顔ようがんの美しき事中々賤しき口にて言ひ難し、我い古いにしへ都にありし時、數多にようごかういの女御更衣を並べ置き、花の譬にせられしが、御名は定かに言ふに及ばず、先づ初春の梅は雪の内より咲き出でて、其匂ひなつかしけれども、枝たをやかなれども匂ひもなし、花もなし、されば何れによそへても、思ひ所はあるものを、此人と申すは、梅うめが香を櫻の花に匂はせて、柳の枝に咲かせても、春の過ぎん事をのみ、見る人

世を亂れし世
を亂りしの誤な
るべし
よも勝るべし
よも勝るべきと
ありたし

惜までや有るべき、唐土の幽王の世を亂れし褒姒が姿、越王勾踐の再び國を覆されし西施の面影と言ふとも、是にはよも勝るべし、聲いと匂やかに、愛敬ありし眠は、如何なる島の夷なりとも、心を迷はさでは有るべき、あはれ殿の御目に掛けばやと、言葉に花を咲かせて申しければ、いとどだに堪へ難き物思ひに、此物語を聞くよりも、忍ぶべき心もなく、扱ひ其人を如何にも申し、媒介して、同じ枕の轉寐こそ叶はずとも、此思を告げて給ひ給へ、さらば御身の爲もいかでか疎略に思ふべき、是は當座の引出物なりとて、側にありし綾の小袖を取らせ給へば、局嬉しく思ひながら、主ある人にいかゞして言ひ寄らん、由なき事を語り出し、行末いかゞあらんと思へども、さらば先づ御文を遊ばせ、便も有らば、御目に掛け侍らんと申しければ、宮崎硯を取り出し、紫の薄様に梅花の匂を焚き染めたるに、思ふ心の底までも、細々と書き流し、せめて一筆の御返事もがなと、涙を添へて渡し給へば、局文受け取りて、急ぎ我家に歸り、色も妙なる花を折り、宰相殿へ参りける。北方出で給ひ、あら珍しや、如何なる風の誘ひつゝ、思ひ寄らずの花の色、懐しき局かなとて、奥の間に召し入れて、先づ酒肴を調へて饗應し給ふ。局申しけるは、此程は彼方此方と打紛れ、御訪問も絶え果てて、仇なる者とや思すらん、只今参る

事別の子細にて侍らず、自ら住み荒したる蓬生も、春は隔てぬ花の宿、夕つ方入らせ給ひて、朧月夜の終夜、慰め奉らんと申さん爲に参つて候ふと申しければ、北方、誠に切なる志にて侍れども、假にも立ち出でたる事もなし、又殿の心も取り難ければ、叶ふまじきと仰せけり。局たくみし志違ひて、斯くと言ひ出すべき言葉もなく、暫し浮世の物語しけるが、懷より玉章を取り落したる體にて、これく御覽候へや、只今参る途にて、此文拾ひ候ふが、いかさま故ある人の手遊やらん、やうがましく認めたり、御慰みに御覽候へと申しければ、北方受け取り給ひ、開きて見給ふに、誠に御言葉を盡しつゝ、奥に一首の歌あり、

はるくゝととめよる宿の櫻花したしからぬも隔つべきやは

遙かに人家を見て云々朗詠
「遙見人家有花入、不論貴賤與親疎」

と有りければ、面白き歌の心かな、古き言葉に、遙かに人家を見て、花あれば入る、貴賤と親疎を論ぜずといふ詩の心を引き直して詠みたる、いかさま是は又初々しき人に思ひ亂れたる人の文なるらん、見るにつけても痛はしく侍るなりとて、局に返し給へば、局便宜よしと思ひて、よしゝ誰人の文なりとも、御手に觸れさせ給ふ事、他生の機縁深かるべし、捨文の返しと思召し、只一筆遊ばして、自らに賜はれかしと申しければ、戯

言を言ふ人かなと打笑ひて、兎角紛かし給へば、重ねて言ひ出すべき由もなく、日も暮れければ、またこそ参るべけれどと立ち歸る。宮崎殿に斯くと申しければ、扱は我文を御手に取り見給ふかや、歌の心を感じ給ふ上、などか御心の無情かるらん、又明日も参りて御返しを取りて給へと聞ゆれば、局も如何にもしてと思ひければ、それより日毎に参りて、包む氣色もなく、初めよりの事ども仄かし、あはれ浮世の習ひに、人の心を慰め給はゞ、頼む方なき我身までも、寄る邊も波の助船、こがれて消えん泡沫の、怨みの程も盡くべきか、其上思ひ染めし愛人は、此國の主なれば、一つは情と言ひながら、處にては處に従ふ習ひなれば、もし一筆の御返しもましまさずは、誰か其怨みを忘るべきと申しけれども、人の聞かんも憚あり 今日より局参るべからずと、簾中深く入り給ふ。力なく立ち歸りける。宮崎殿に申しけるは、如何なる雲の上人も、情の道は知るものを、此人は眉目容貌こそ生れつきたらめ、心はさすが田舎人、物をも知らぬ人なれば、言葉の色をも聞き知らず、自らが使には、叶ふべきとも覺えず、只思召し留り給へかし、面目なく候ふと言ひ捨てて、走り歸りければ、今までは使の歸るを便にて、少し心も慰みけるに、頼み寄るべき縁もなし、せん方なく思ひければ、田邊の七良を呼び出し、もしやと

きらの兵―綺羅
の意にて精選の
武士をいふ

頼みし吾戀の、空しくなるこそ無念なれ、我領内にありながら、上も恐れぬ女は、押寄せて奪ひ取り、無情き心に思ひ知らせん、はや打つ立てと怒り給へば、七良由なき事と思へども、氣色變りて見えければ、尤も然るべき御計らひなり、某一人なりとも忍び行き、奪ひ取らんはいと易き事なれども、彼もさすが故ある者と聞えければ、欺くに及ばず、軍勢を催して、一方の山より攻め下り、東の方を開けておくならば、定めて夫婦郎従も落ちて行くなるべし、行かん處を道に兵を伏せて、男をば切つて捨て、女をば抱き取り、この御館へ齋ひ入れ奉らん事、今日の日を過すべからず、御心易く思召せとて、頼もしけに申しければ、宮崎悦び給ひ、片時も早く見奉らん、軍勢を催せとて、きらの兵三十八騎、雑兵合せて百五十騎の軍兵を揃へ、今日の暮方に押寄せんとて、馬に鞍を置き、庭騎するものもあり、太刀、刀を磨ぎ、弓の弦を食濕し、日の暮るゝをこそ待ちたりけれ。此事隠れなかりければ、里へ急ぎ宰相殿に参り、只今押寄せ申すと告げければ、宰相は夢にも知らせ給はず、此方に云々と語り給へば、元より我故と思召し、初めよりの事ども語り給ふ。力なき次第なり、誠に御志難有く侍れども、我故に御身の命を失ひ給はんも心憂し、一先づ彼の方へ行き給ひ、人の心を慰めて、夢の浮世を暮らし給へ、御心

二世の契なりしと聞きければ、
「二世の契なりと聞きければさのみ力あとし給ふな」などの文句脱落せしなるべし
一度のたのしみ
一度たのみしの行か

寄せ來りたる人「たる」の二字不用なるべし
かみよーかみがみ(神々)の誤

變らずは、二世の契なりしと聞きければ、愚なる人の言葉かな、賢臣二君に事へず、貞女兩夫に見えずと申す事の候へば、一度のたのしみ御身を捨て何處へか行くべきぞや、もし軍勢の寄せ來らば、御身を先に立てて、切つて出で、思ふ儘に軍して、叶はぬ時は引き籠り、刺違へて死出の山三途の川を、手に手を取りて行くならば、何の恨事か候ふべき、其上千萬餘騎寄せ來るとも、自らが謀にて追ひ拂ひて見せ申すべし、太刀も刀もいるまじとて、一間所に引き籠る。さもゆゑしき姿にて、寄する敵を待ち給ふ。去程に日も西山に傾けば、時分よしとて、宮崎を先として、百五十騎兵等、太刀、薙刀の鞘を外し、さしも嶮しき山路を、谷も谷とも崖とも言はずして、三方の峯に馳せ上り、館を目掛けて弓取り直して、下り拳に差詰め引詰め散々に射たりけり。其中に田邊の七良進み出で、味方の軍兵に向つて言ひけるは、方々はいかゞ心得給ふらん、弓矢を留め給へ、是は聊の怨言せんため、此處へ寄せ來りたる人を威さん其爲の謀なり、よし敵を射殺さば勳功は扱置き、かみよの御不審を蒙るべし、今日の軍の大將は此七良が承りたりとて、只一人門外まで馳せ來り、大音揚げて言ひけるは、只今こゝに寄する事別の子細に候はず、此山中に隠れ給ひて、夜討、強盜を業として、いみじき有様を聞召されて、

御迎へに參れ七良と一御迎へに參れと七良は一の誤なるべし

弦をはせ切る一弦をば切るの衍か

討つて參らせよと、忝くも宣旨を帶して參りたり、誠は身の咎の有るならば、尋常に腹を切り給へ、さも無くは主に出でて、其理由を申し開き給へと呼ばはりければ、籠り居たる若黨ども驚き騒ぎ、寄手は雲霞の如く近づきけるに、何とて臆し給ふぞや、はや打出で給へと薙きけれども、宰相殿、北方に諫められ、少しも驚き給はず。暫くありて北方、はや敵の寄せ來りたるやらん、物騒しく聞えけるぞや、いでさらば防がんとて、何時よりも尋常に出立ち、皆紅の扇を持ち、廣椽に立ち出でて虚空を招き給へば、宮崎是を見て、人々靜まり給へ、わが思ふ敵の立ち出でて、此方を招くは降參すると覺えたり、御迎へに參れ、七良と、獨笑して悦びけり。あら不思議や、俄に山風烈しく吹き、黒雲一群棚引きて、館の上に立ち覆ひけるが、雲の内に異類異形の物こそ見えたりけれ。眉目よき女房の具足、胄を鎧ひつゝ、弓矢を持つて進むもあり、夜叉、羅刹の形にて、矛を持つて振るもあり、鷲、熊鷹の人業に、劍を植ゑたる如くにて、敵の前に飛び行きて、弓の弦をはせ切るところもあり。

蝶、蜻蛉は甲冑の隙間を狙ひ、眼に塞りて、さしにも猛き武夫も、働くべきやうもなし。寄手の人々呆れ果てて、心も消え、そのまゝ絶入る者もあり、退く事も叶はず、まして進む

に及ばねば、馬諸共に立竦み、我助け給へと、天に祈誓し念佛申し、さも哀れなる有様なり。

されども田邊の七良は文武二道の者なれば、大將の前に馳せ歸る。さればこそ初めより由なき事と思へども、仰せを背き難きにより、是まで御供申すなり、天より降人と聞きしが、僞ならず覺えたり、如何様佛神の化身なるべし、佛の怒るを鎮むるには、心經に若くはなし、心の内に祈念して、御經を讀誦し給ひて、惡魔を鎮め給へと、高らかに讀みければ、次第々々に雲晴れて、變化のものも失せにけり。人々悦びて危き命助かり、我先にとぞ歸りけり。館に歸り誰々討たれたると思ひ給へば、殊に御經の功德にや、手負うたる者一人もなし。宮崎悦び給ひ、我邪の働きて、かゝる奇特を見る事よ、偏へに佛の方便なれ、是を菩提の種として、今日より浮世を厭ひつゝ、佛道を願はんとして、日比貯へ置きたる財寶を、貧なる者に與へ、慈悲第一の人となり、後生善所の營みは、難有かりし發心なり。惡に強き人は必ず善にも強き事、今に始めぬ事どもなり。去る間宰相殿は不思議の難を逃れ給ひ、北方に宣ふやう、初めより御身は尋常人とは覺えぬに、只今の事どもは人間の業ならず、いかさま佛の化身と拜み奉るなり、此上は包まず名を名





告らせ給へと有りければ、いやとよ、自らが計略にあらす、御身心素直にして、慈悲深き人なれば、佛神の力を添へ給ふ事の難有さよ、いざさらば自らが父母のもとを見せ奉らんとて、夜に紛れ、只二人忍び出で、山路遙々と分け入りて、嶮しき谷に下り給へば、數千丈高き巖より白き布引延へたる如くなる瀧の白波漲りて落ち、岸根の松は枝乗れて、心凄き苔の細道踏み分けて、片山際の洞の中へ入ると思へば、宮殿樓閣は蓑を竝べ、七寶莊嚴の眞木柱、金銀の瓦を敷き竝べ、咸陽宮の大内裏と申すとも、是にはよも勝らじと思ひつゝ、踏む足もしどろにて、めでたう遙かに入り給へば、内よりも青侍官女と思しき者、我先にと微語き、北方に取附きて、珍しくも入らせ給ふものかなとて、前後に立つて介錯申し、奥の間に請じければ、又公卿、殿上人と思しき人々走り出で、宰相殿に色代して、是も同じ座敷に直し、煌々しき體なり。其中に女御と思しき人、宰相殿の前に寄り、萬恥がましき我姫を、留め給ふ御志、何時の世にかは忘るべき、疾く入らせ給へと申すべきを、一日々々と打過ぎ參らせ、明暮御姿を見まほしく思ひしに、遙々是まで渡らせ給ひ、御見參に入り奉り、自らが心の内如何ばかり嬉しく侍ると、御推量あるべき、それくと宣へば、女房達承り、黄金の銚子に盃取り添へて出でけ

としをけー俊隆
の誤か

れば、山海の珍物に、國土の菓子くわしを調へて、三々九度の土器かはらけは擧ぐるに暇ひまこそなかりけり。かゝる不思議の處に入らせ給ふ御慰くわんひんみに、管絃くわんげんをして聞かせ奉らんとて、琵琶びば、琴こと、和琴わこん、簫せう、箏ひちつき、思おもひくゝに音ねを取りて、樂がくの數かずをぞ盡しける。昔としをけといふ者、唐もろ土こしにて習しひ傳つへし琴の爪つま、蟬丸せんまるといふ世捨人逢坂山に引き籠り、琵琶を彈ぜし撥音はちおき、用よう明天皇のいにしへ上の空なる戀こをして、さんろと呼よばれし時、思おもひを晴らす雨の中に、音ねを取り給ふ笛ふえの音ねも、是にはいかで勝るべき、只是極樂世界ごくらくせかいにて菩薩聖衆ぼさつしやうしゆの歡喜くわんぎの時、音樂の曲難ありがた有あかりし事どもなり。

かくて夜も明方あけがたになりければ、今宵の御引出物參らせんとて、黄金千兩こがね、銀しろがねの盆に積りみ、綾羅錦繡りようらんしうの卷物まきものを、山の如くに積み上げて、御前おんまへに差置き、夜明けば人目つよましければ、御名殘惜わがくれがしく候へども、はやく歸らせ給ふべし、我隱家わがくれがを初めてお目に掛くる事恥しく候へども、此後このちは常に入らせ給へと、暇いとまひ乞こして出で給へば、それくゝ送り奉れ、承ると申して、虚空を翔かる車に、二人の人々乗のり給へば、引出物の數々を鳥つばさの翼つばさに乗のせ、或は力士あるひりきしに負はせて雲に乗せてぞ送りける。片時へんしの程にて、ありし館やかたに送り著つき、皆々立ち歸りけり。愈其家繁昌えきして、近國他國のものどもの、附つき従ふ事限りなし。或

時北方宣ふは、申すにつけて恐れなれども、今は父母の許へ歸るべきと思ふなり、假初に馴れ初めて、此年月の情の色、生々世々に忘るまじ、御名残惜しく候ふとて、打伏して泣き給へば、宰相聞召し、あら思ひ寄らずの御言葉かな、後の世かけてと思ひしに、仇なる人の心ぞや、我淺ましき折に問ひ寄り給ふ志、今更何に見落され、捨て給はんとの言葉ぞや、よし／＼それも力なし、御身の父母の有様は、我等如きの凡夫の身を見届け給はんとも思はれず、されども御身は假に浮世に現れて、語らひ初めし睦言は、隔てぬ中と思ひしに、せめて三年も添はずして、残り留る憂き程は、絶えて存ふべきならずと、泣き口説き給へば、北方聞召し、その御心の痛はしさに、今まで斯くとも申し得ず、我は誠の人間にあらず、遂に添ひ果つべき身ならねば、先づ此度は立ち別れ、生を變へて、誠の妻となるべきぞや、御形見の一筆を賜はり、それを知邊とし尋ね給へ自らも尋ね奉り、思ふ事なく暮すべし、父母の許にて聞召されし酒は、不老不死の藥にて候ふ、面影も變らず、命の終る事も無し、錦金襴の巻物は、如何程裁ちて取り給ふとも、盡くる事も有るまじ、黄金は使ふに従ひて、跡見ゆる事ならじ、いつまで語り侍るとも、名残は愈増さるべき、暇申してさらばとて、廣椽に出で給ふを、御袖に取り

あら恥しや我身
かなー「あら恥
しの我身かな」
の誤にや

つきて、暫し留め給ひければ、我をば誰と思召す、澤邊にて獵師に捕られし雛鶴なり、
極まる命を助け給ふ、其恩徳を報ぜんため、人間となりて來りたり、あら恥しや我身か
なと、もとの姿を見えんとて、虚空に飛びてぞ歸りける。宰相はいとど哀れに思ひつ
つ、此二年の情の程、思ひいづれば懐しく、後を見送り、只茫然と立ち給ふ。

鶴のさうし中

鶴のさうし下

諸宰相はありし閨に立ち歸り、枕並べし床の上、打著せし中の香の唐衣、今は獨の手枕は、寐覺のたびに別れつゝ、夢にも姿見々えねば、遣方もなき思ひの程、せめて慰みには、身内の者を近づけ、里人を語らひ、春は花の下にて日を暮らし、秋は月の前にて夜を明かし、年月豊かに住み給ふ。其比三條の内大臣と申すは、君の御伯父にて時の覺え、他に異にして、家の繁昌肩を並ぶる人もなし、されども御子の無き事を歎き給ひ、天に祈誓し給へば、御納受ましくて、北の御方懷胎し給ひて、程なく姫君を儲け給ふ。されば天より具ふ形なれば、耀く玉とも申すべき。父母悦び給ひ、御命長かれとて、玉鶴姫と名づけつゝ、數多の乳母をつけ、齋き傳き給ふ程に、愈光増さりけり。幼き時は其心もつかざるが、成人らせ給ふにより、左の腕の肘のかよりまで身に添ひて、御手自在ならず。父母御覽じて、大人しくなるならば、さもあらじと思ひしに、年月に従ひて、斯様に取付きてある事い、胎内にての事なるか、産み落したる其時に、荒く當りし故なる

みなくの人
なみの衍か

かやと、藥を與へて揉み合せ、色々養生し給へども、其甲斐なくて憂き事と思ひながら、世の人の見る事ならず、只眉目容貌の類なきをば、かたへの公卿殿上人聞き傳へく、思ひを掛けぬ人も無し。やうく十三になり給へば、父母宣ふやう、姿かよりより心様も優しければ、女御に供へんと思へども、手の叶はぬ事の恥がましければ、御目に掛くるに及び難し、さればとてみなくの人に見せんも心憂し、如何せんと歎き給ふ折節、關白殿の御子に二位の中將と聞えし人、此姫君を思ひ掛け人して斯くと宣へば、内大臣嬉しき事と思召し、北方と談合せ、此年の八月には必ず参らせんと、御返しありて、其用意をぞし給ひける。

姫君は此事聞召し、父母に宣ふ、我は身にも不具候へば、何處へも参るまじ、只御暇を賜はれ、片山陰に引き籠り、佛道を願ひて靈山淨土に生れんと思ふなり、女御、后も此世ばかりの樂みなれば、羨しく思はれず、ましてそれより下の人に相馴れ侍らんとは、更に思ひも寄らずとて、歎き悲み給ふなり。父母もいとほしき姫君なれば、さのみ愛で諫めて、目の前の憂き別れも有らんかと思召し、兎も角も御身の計らひなるべし、さりながら御身偶々儲けし事なれば、片時離れて有るべきかや、我々世にある程は慰めて給ひ

給へ、是孝行のこれかつかう一つなり、倅亡き後は尙々頼み申すなりとて、二位の中將殿への營みも差置きて、其年も暮れ、十四の春にぞなり給ふ。雨の晴間の朝日影、長閑なりける花の色、うつろふ東の窓の前に、簾几帳をかゝけて、薔める花に心を痛ましめ、散りぬる櫻に怨を添へ、思ひくゝに花の短冊つけ給ふ。内大臣、

かく散るを見てはくやしきさくら花またくる春は待たじとぞ思ふ
北の方、

雨のうちにほころびそむる花の色朝日に散るぞしづ心なき
玉鶴姫、

あひいでし若木の櫻さかりぞと見せまくほしき花のいろかな
と詠み給ひければ、父母も怪しの歌の心かな、如何なる思ひの有りて、かやうに歌をば詠みけんと思ひながら、心を問はん由もなし。

各の歌を、姫君の筆取りにて、短冊に書き留め、庭に下り立ちて、櫻の枝を引き撓めて、結び付けんとし給ひし、其處の枝強くして、姫君の取り付き給ふ左の御手を引き上げてこそ見えたりけれ。人々驚き、いかに御手の痛み候ふやとて、庭へ走り下り、御肌



を見奉るに、附き添ひたる腕の延びさせ給ふぞ不思議なり。父母、傳、乳母、めでたき事なりとて、悦びける事斜ならず。さりながら身に取り付く事もやと、御肌おんはだに白粉はくふんの煉ねり薬ぐすりをつけ給へば、腋わきの下したに玉章あり。あら不思議やとて、押開き見給へば、只一行、偽らぬ言葉の末を頼みにて

とばかりあり。愈々不思議に思ひ給ひつゝ、姫君に尋ね給へども、前の世の事をばいかに知召しりしめさるべき、自らも知らず候ふとて、顔打赤めておはしける。内大臣殿宣ふは、此姫は天より與へ給ふ子なれば、如何様故ある人の再來さいらいなるべし、かゝる不思議の事どもを、下したにて計らひ申さんより、ありの儘に奏聞そうもんし奉り、勅詔ちよくちやうに任せて、兎も角も方付かたづき侍らんとて、彼の短冊を持ちて急ぎ参内申し、初めよりの事ども詳しく申し上げ給へば、帝不思議に思召し、短冊を取らせ給ひ、打返し々々えいらん勸覽ありけるに、未だ新しき筆の跡なれば、もし見知りたる者やあるとて、大臣、公卿の御中へ出し給ふ。其比才學優長さいがくいうなりし、其後大將といふ人熟々と見給ひて、あら不思議や、此筆は、むねまさの左大將の一子、宰相右兵衛督が手跡に似たる處の候ふぞや、此人は慈悲の心を主として、七珍萬寶ちんまんほうを非人に施し、いつしか其身衰へて、行方知らずなり侍るなり、年號を數ふるに

今年十五年に罷り成る、内大臣の姫は十四になるなれば、生れぬ先の事なるべし、彼の人世に無き事はよも有らじ、急ぎ尋ね給へと、奏聞申されければ、帝愈々不思議に思召し、さらば官人をもつて尋ねよとて、日本六十餘州に宣旨を下し、其國々の守護に仰せて、谷、峰、賤が庵まで残る處なくぞ探しける。近國の官人は其日に歸りて無き由を申し、遠國の國司は五日十日を隔て、さやうの人は無しといふ。諸は此世に亡き身となるかやと、せん方なく思召すところへ、或代官の申しけるは、是より北山若狹の境の山陰には、天よりの降人として、此十五年が間、富み榮えて侍るが、此人こそ怪しけれと奏しければ、諸はそれなるらんとて、急ぎ勅使を下されけり。其時の勅使は花園の左中辨とて、宰相の爲には從兄弟なり。彼の處に下り案内もなく入り給へば、宰相はいにしへ二十一にて世を厭ひ給ひし姿、少しもかはらざりければ、左中辨なじかは見損じ給ふべき、如何に御身はこの所におはするかや、此程さる子細ありて、秋津島が其中を、馬に召されなく尋ね給ふなり、はやく、參内あるべしとて、取るものも取り敢へず、馬に召されければ、宰相殿は夢にも知らぬ事なれば、以ての外に驚き給へども、勅使許し申さず、急ぎ都に上りけり。今までは世を厭ひし人なれば、五位の装束召されしが、いにしへの

三位の宰相の装束にて、君の御前おまへに出で給ふ。帝御側みかどそばへ近く召されて、其後御物語ども暫く有りて、諸も此の手を見知りたるかとて、彼の短冊を出し給ふ。宰相是を見給ひて、はつと思ひければ、時ならず顔に紅葉もみぢを散らし、其事となく涙浮びて、何とも御返しをば申さず、頭かうべを地につけてぞおはしける。人々色を見て、諸は疑ふところなし、御前おまへにて包み給はんも恐れなり、思合する事あらば、ありの儘に語り給へと、面々めんめん申し給へば、宰相申されけるは、諸此文は如何なる人の持ち來り、御前おまへには留り候ふや、それにつき思合する事をも、御物語申し上げ候はんと宣へば、先づ御身の言葉を聞きて、此方こなたにて申すべし、僞いつはりなく語り侍はんべれと仰せければ、ありの儘に申さんと思へども、鶴の變じて契ちぎりをこめたる事、誠しからぬ事なれば、少し僞の申さばやと思ひ、今は何をか包むべき某貧まづしくなり果てて、身の置所おきどころなき儘に、此十五年以前より、片山里に忍び居て、明暮御經おんきやうを讀み、後の世のちよを願ひしに、何處いづくとも知らぬ女性によしやうの來りつゝ、自らが妻となり、寶たからを數多與へけるが、明くる年の春の頃、我は誠の人ならねば、生しやうを變へて夫婦となり、二世の契を結ばんとて、互たがひの形見を取交し、其人の手遊てずきみは是に持ちて候ふとて、肌はだの守まもりより、短冊一つ取出し、御前おまへにこそ置きにけり。人々あら不思議やとて見給ふに、

ふたゝび生れあはんとぞ思ふ

とあり。初めの短冊と引合せけるに、紙も同じ紙にて、歌の言葉を讀み續くるに、

いつはらぬ言葉の末をたのみにてふたゝび生れあはんとぞ思ふ

と讀み合せければ、君を始め奉り、御前おまへにあり合ふ大臣、公卿も、あつとばかり感じつ
つ、暫く物も宣はず。

思召しければ―
思召しけれどもの
衍なるべし

やゝありて勅諭ありけるは、御身心素直すなほにして、慈悲心深くある故に、佛神の御恵と覺
えたり。内大臣それ〴〵明あかし侍れと仰せければ、初めよりの事ども、詳しく語り給ひ
ける。かゝる不思議の事どもは、昔も今も末代も有るべき事とも覺えず、急ぎ吉日を選
び祝言しうげん有るべきとて、昔の屋形をしつらひ、金銀の鏤ちりはめて、玉鶴姫を迎へ給ふ。姫君は
世の人に見々みみえん事を、疎うそましく思召しければ、此宰相とは前世ぜんせの契の事なれば、など
かは隔て有るべきぞや、何時いつよりも御心も浮きやかに、悦なつかび給ふよそほひなり。宰相殿
は見給ひて、昔契りし面影の、少しも變らざりければ、懷なつかしとも愚なり。かゝる目出度
き事あらじと、忝かたじけなくも、君よりの贈物おくりもの、大臣、公卿の捧物さくけもの、山の如くにぞ積み上げて、
門前には馬車うまぐるまの、所狭ところせきまで見えたりけり。やがて官位を賜はり、左大臣まさあきらと

ぞ申しける。斯くて其年の秋に、北方きたのかたたどならずなり給ふが、月日にわづらひなく、明くる五月に、玉の如くなる若君の出で來給ひ、それより打續き姫君若君の數五人までこそ出で來けれ。何れも容顏ようがん勝れければ、或は后に立ち給ふ御方もあり、或は關白殿むすねの婿むこにならせ給ふもあり、めでたしとも中々に、譬へん方もなかりけり。去程に大臣殿かみれぎは隠里かくれざとにて羞すめける不老不思議の藥の酒の威徳にて、御齡おんよはひもとせ百年に餘り給へども、姿形すがたかたちは老いもせず。元より北の御方は天に稟うけたる事なれば、御年みとしかさ重なるに従ひて、花の顔容麗しく、御惠みの深き事、水に影さす月の如し。されば聖人一人世に出づれば、萬民心素直になりて、いと靜謐せいひつなれば、遠國波濤えんごくはたうも穩かにして頼みあり。民の竈かまども賑しく、運はこぶ貢みつぎの道直に、關くわんの閉とざさぬ御代となりにけり。是これを以つて思ふに、只假初かりそめにも夫婦の縁を結ぶ事、前世の契淺けいせんからず、後の世かけて頼もしく、神の定めし中なれば、互に隔たる心もなく、交かはす情なさけの末遂けて、望まざるに位を進み、貯へざるに財寶たからをうけ、出で入る人は袖を連ね、ますく富貴繁昌ふつきの家とぞなり給ふなり。

寛文二壬 五月吉日

三條通菱屋町

ぬ屋仁兵衛